

平櫛田中と福山

心フルス
ふくやま美術館

2012年6月27日(水)－9月9日(日) 会場:常設展示室
前期7月29日(日)まで 後期7月31日(火)から

※月曜休館/ただし、7月16日(月)、8月13日(月)は開館、7月17日(火)は休館



福山駅前広場に立つ(五浦釣人)。平櫛の代表作の一つであり、平櫛と福山との深い関わりを示すシンボリックな存在でもある。一九七四年二月、山陽新幹線開通と福山駅舎落成を記念して設置された。モデルは平櫛の師・岡倉天心。台座には天心を称える文のプレートが嵌め込まれている。

このたびの所蔵品展の開催期間中には、7月14日(土)から9月2日(日)まで、特別展「生誕140年 平櫛田中展」も開催いたします。平櫛田中は、明治5年(1872)に現在の岡山県井原市で生まれたのち、現在の福山市今津町に所在した平櫛家の養子に入りそこで少年期を過ごします。その後大阪へ、さらに東京へ出て、彫刻家を目指します。高村光雲に入門し、さらに晩年の岡倉天心や禅僧・西山禾山の知遇を得て、技術と素養を豊かなものにしていきます。そして大正・昭和を通し精神性豊かな肖像彫刻を次々と発表し、日本彫刻史上に珠玉の作品を遺しました。

東京にアトリエを構え、日本を代表する彫刻家として活躍した一方で、平櫛は、少年期を過ごした福山とも晩年まで関わりを持ち、故郷の支援者や愛好家、機関のもとにも多くの作品を遺しています。このたびの所蔵品展では、特別展の開催に寄せて、主に福山近郊に遺された作品を特集展示し、平櫛と福山との関連を探ります。

福山・平櫛田中紀行

2012年(平成24年)、日本彫刻界で長きに亘って活躍し、珠玉の作品を遺した彫刻家・平櫛田中の生誕140年を迎えた。存命中はもちろん、近年においても、平櫛の顕彰活動は各地で行われ、多くの作品がそこでは紹介されてきた。中でも生誕地である岡山県井原市と、晩年を過ごした東京都小平市に美術館が建設され、多くの作品がそこで保管されて、継続的に充実した調査研究と展覧会が行われてきたことは、特筆すべきであろう。

一方、平櫛姓を得て少年期を過ごした旧松永市では、1965年(昭和40年)に松永市名誉市民に、翌年合併により福山市名誉市民に推戴され、いくつかの小展覧会や顕彰活動が、各種機関や地域の有志によって行われてきた。しかしながら公的機関による大規模な回顧展となると、1980年(昭和55年)に福山城博物館で行われた追悼展以来、行われてこなかったのである。このたびの生誕140年記念展は、郷土ゆかりの作家の顕彰という、ふくやま美術館の使命にまさに則したものであり、福山近隣の人々が永く切望していたものでもあるだろう。

今回の所蔵品展は、この生誕140年記念展の開催を機に、改めて平櫛と福山との関わりを探り、地域に伝存してきた作品を特集展示するものである。この特集展示の事前調査を通して改めて感じたことは、平櫛と福山との関わりは、深くそして継続的なものであったということだ。本稿では展覧会出品作品に触れながら、調査を通じて接することができた、福山市域に残る平櫛の足跡を辿ってきたい。

現在の岡山県井原市で幼少期を過ごした田中倬太郎は、同じく井原の片山家への入籍を経たのち、10歳のとき平櫛家に入籍し、その後養家が所在した広島県沼隈郡今津村(現・福山市今津町)で暮らし始めた。今津町の旧居址には、1968年(昭和43年)に有志によって石碑が建てられている(挿図1)。石碑には次のような銘文が刻まれている。

日本彫刻界の巨匠平櫛田中翁(名倬太郎)は七才の時井原市の田中家から当初隣屋平櫛惣八氏の養嗣子として成長 彫刻家を志し明治三十年東京に出て高村光雲の門に学ぶ(中略)なお九十七才の今日かくしゃくと制作に精進する姿は郷土の誇りに外ならない ここに私達は翁の功績を称えると共に後世への道標となる記念碑を旧居跡の一遇に建立する

昭和四十三年秋分の日 福山市今津町有志の会

旧居跡のすぐそばには、真言宗の寺院・薬師寺が所在する。平櫛は今津の家で暮らしていた当時や、療養のため帰省していた22歳の頃などに、養家のすぐ近くにあったこの寺院と交流を深めていたらしい。後年、平櫛は亡き父母及び一切万霊の成仏を願って《薬師仏尊像》(挿図2)を制作し、この薬師寺に納めた。《薬師仏光背及蓮座銘文》(No.18)は、この光背裏・台座裏に刻んだ銘文を、平櫛が改めて書写したものである。

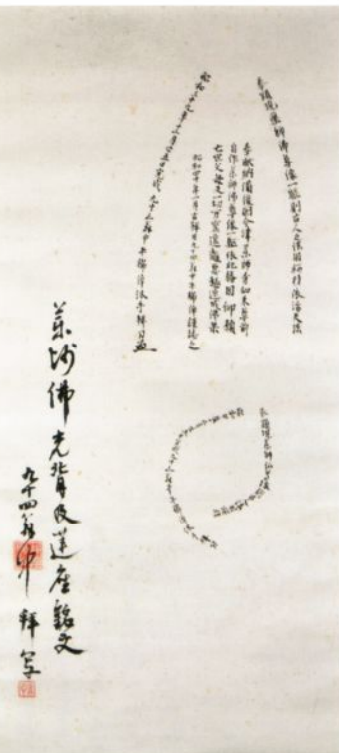
薬師寺脇の小道を北へ歩いてゆくと、「にごり池」と呼ばれる池がある。そのほわりにも平櫛にまつわる石碑が建つ(挿図3)。これは福山市名誉市民たる平櫛を顕彰するために没後に建てられたものだ。石碑の傍からは、平櫛がかつて過ごした今津の町並を一望することができる。

「にごり池」からさらに北へ進むと、福山市立今津小学校に行き着く。校門をくぐると、正面には「いんまやらねばいつできる わしがやらねばたれがやる」のお馴染みの標語が刻まれた石碑が建つ。後年、平櫛はこの故郷の小学校にいくつかの作品を寄贈している。《蕪村像》(No.6、現在福山城博物館寄託)はその代表的なものだ。小学校創立60周年を記念して贈られた書作品《至誠》(No.16)と、校門前の石碑の原作品である《いんまやらねば》(No.15)も見ごたえのある大作である。「いんまやらねばいつできる」は、現在でも今津小学校での学習・行事等でしばしば教育上の指標となっているという。平櫛の作品のみならず、制作の信条までもが今に伝わる好例だと言えよう。



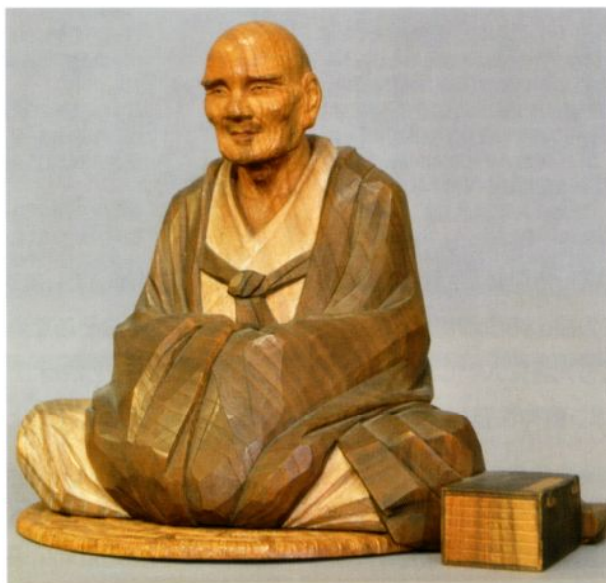
挿図3 平櫛田中記念碑
(福山市今津町)

挿図1 旧居址の石碑
(福山市今津町)



挿図2 平櫛田中
《薬師仏尊像》
福山・薬師寺

18 平櫛田中
《薬師仏光背及蓮座銘文》



6 平櫛田中《蕪村像》

1886年(明治19年)、平櫛は大阪へ丁稚奉公に出ることとなり、今津の地を離れた。その後病を患い、一時的に平櫛家に戻って静養するが、1895年(明治28年)には本格的に彫刻を学ぶ決心をし、再び今津を離れる。その後彫刻家として大成し、息の長い活躍をすることになるのは周知の通りであり、今回の生誕140年記念展では、その活躍の中で制作された多くの代表作が展示される。しかしながら、東京で華々しい活躍を続けている間もなお、故郷との関わりは継続的に有していた。1926年(昭和元年)、長女幾久代が逝去した際には、平櫛はその死を悼み、平櫛家が門徒であった福山市柳津の善立寺に《大日如来香合》を奉納した。さらに1935年(昭和10年)には、父・母・継母の菩提を弔うため、同じく善立寺に《馬郎婦菩薩》を奉納している。前述の今津小学校へ《蕪村像》や《至誠》を寄贈したのも同じ頃である。

戦後になっても、平櫛は変わらず故郷の人々と継続的に交流を重ねていた。その1つが、今津へ帰省する折に利用していた松永町の「大吉旅館」である。平櫛とは、彫刻家になるために今津の地を離れる以前から交流があったといい、晩年に至るまで何度もこの旅館を利用した記録が残っている。平櫛がこの旅館を利用した折には、追ってここで調理した鯛の浜焼きや、鞆の竹輪を東京へ送っていた。平櫛はこれを大変に好んでいたという。大吉旅館は、「割烹大吉」として現在も営業を続けている。

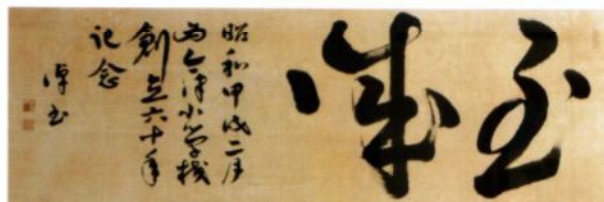
平櫛が今津・松永の地と公の形で密接に関わるようになるのは、1965年(昭和40年)、松永市名誉市民に推戴されたことによってである。ここで町村合併の経緯を整理しておく、1953年(昭和28年)に平櫛家が所在した今津町と、隣接する松永町とが合併し、新設の松永町が誕生した。翌年、さらにこれが周辺の村と合併し、松永市が誕生する。その名誉市民の第1号に平櫛が推戴されたのである。本展出品の肖像写真の1つ(No.45)は、名誉市民章贈呈式に出席するため平櫛が帰省した折、今津の薬師寺にて撮影されたものだ。そして松永市は1966年(昭和41年)に福山市と合併し、それに伴って平櫛は福山市名誉市民となる。

松永市名誉市民への推戴は、平櫛にとって特別な意味があったようである。名誉市民章贈呈式は、昭和40年4月24日、松永市立(現・福山市立)大成館中学校で行われた。式での講演で、平櫛は次のように話したと伝えられている。

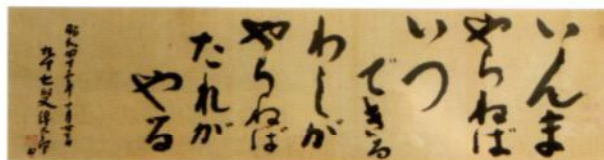
私は文化勲章をいただいた時よりもこの方が嬉しい。私の父は私を商人にしようとして大阪に出した。それなのに私は彫刻界にはいった。私は父の志に反して今日に及んでいる。これを亡き父母の墓前にお詫びし今日の栄誉を報告したいためである。
(石井亮吉「名誉市民第一号 平櫛田中先生をお迎えて」、『まこと』第50巻2号、1965年7月)

この式典では、平櫛が故郷の松永へ寄贈した《如是仙人》と《西山逍遙》の2点の作品が展示された。《西山逍遙》は現在広島県立松永高等学校の所蔵となっている(広島県立美術館寄託)。《如是仙人》は松永市へ贈られ、合併に伴ってこれが福山市の所蔵となり、現在は福山城博物館が保管している(No.2)。これは《灰袋子》の題でしばしば作られたモチーフである。この作品には平櫛の筆による説明文(No.3)も付属しており、病気だと思われていた仙人が立ち上がって、俺は病気をしておらぬ、病気は臓腑があるものがするのだ、俺には臓腑はないぞ、と言って口を開いて指さした、というエピソードがそこでは説明されている。

ここまで、旧松永市域の事例を追ってきた。平櫛家が所在した旧松永市域と平櫛との関わりが深いのはいわば当然だが、福山市中心部にも、市民にとって極めて重要な作品が残されている。福山駅前の《五浦釣人》がそれだ。駅前の名所として、あるいは待ち合わせスポットとして多くの市民に親しまれている作品であり、福山市民で一度も観た事が無いという人はまず居ないのではないだろうか。この作品は1974年(昭和49年)2月、山陽新幹線開通と福山駅舎落成を記念して駅前に設置された。台座には次の銘文を記したプレートが嵌め込まれている。



16 平櫛田中《至誠》



15 平櫛田中《いんまやらねば》



45 《平櫛田中の肖像写真》



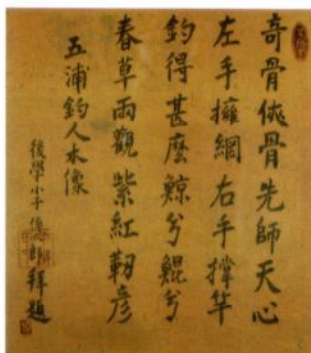
2 平櫛田中《灰袋子》



8 平櫛田中《鶴寿》



3 平櫛田中《灰袋子説明文》



22 平櫛田中《五浦釣人像銘文》



5 平櫛田中《鶴筆》



1 平櫛田中《尋牛》

奇骨俠骨先師天心
左手擁網右手撐竿
釣得甚麼鯨兮鯢兮
春草兩觀紫紅靱彦

常人離れて男気に富む岡倉天心先生。左手には網を、右手には竿を持っている。釣り得たのはどうだ、鯨か鯢(はらご。想像上の大魚)か、いや菱田春草・横山大観・下村観山・今村紫紅・安田靱彦か——銘文の意味はこのようなものだ。《五浦釣人》は、東京美術学校を追われた岡倉天心が、新たに日本美術院を設置した茨城県五浦の地で釣りをするさまを表している。そのような逆境を乗り越えて、菱田春草・横山大観・下村観山・今村紫紅・安田靱彦といった巨匠を育てたことを称えているのである。ちなみに、本展出品の《五浦釣人像銘文》(No.22)は、福山駅前像台座に嵌め込まれたプレートのみさに原作品である。平櫛が岡倉天心をモチーフとした作品は、他にも《鶴筆》(No.5)や、福山城博物館に常設展示されている《岡倉天心胸像》といった複数のパターンが存在し、そのいずれもが、天心の業績、そして人柄への深い恭敬の念から制作されたものなのである。

そして、晩年の平櫛と福山との繋がりを考える上では、それを介した人物として、福山市沼隈町出身の彫刻家・濱田泰三(1919-2000)の存在も大きい。濱田は17歳の時に沼隈を出て平櫛に弟子入りするも、20歳で出征。戦後は造船業に携わるが、50代で再び本格的に彫刻の道へ戻り、晩年の平櫛の秘書役を務めた。

1979年(昭和54年)、平櫛は107歳の天寿を全うした。追悼展は平櫛ゆかりの各地で開かれ、福山では翌年10月に福山城博物館で「福山市名誉市民・追悼 平櫛田中秀作展」が開かれた。そこでは全国各地から平櫛の名作が集められたほか、福山近隣の人々に愛蔵されてきた作品もあわせて展示された。《尋牛》(No.1)などはこの時期に遺族から寄贈された作品である。

このたびの生誕140年記念展では、それから32年ぶりに平櫛の代表作が福山に集う。平櫛が福山の人々と交流を深めた頃からは、随分と時が経った。交流した人々は高齢になり、既に代替りをした場合も少なくない。今一度、郷土が生んだこの巨匠の業績と、そして彼が故郷との交流の中で遺したものを、2つの展覧会で感じて頂ければ幸いである。

最後になりましたが、本展覧会開催にあたり貴重な作品をご出品賜ったご所蔵家の皆様と、展覧会実現のためにご支援を賜った関係各位に、心より感謝申し上げます。

(学芸員 濱田恒志)



12 平櫛田中《福聚大黒天尊像》

関連年表

(年齢は数え年)

1872年(明治5)	1歳	2月23日(旧暦1月15日)、岡山県後月郡に生まれる。本名俣太郎。
1882年(明治15)	11歳	5月30日、広島県沼隈郡今津村(現在の福山市今津町)の平櫛家に入籍。
1885年(明治18)	14歳	秋、平櫛家に入って養父母との生活を始める。
1886年(明治19)	15歳	11月、大阪の小物問屋備貞に丁稚奉公に出る。
1893年(明治26)	22歳	大阪での奉公を止め、岡山の石鏡商店山商会の支店に働く。同商会の技師の縁故で、人形師・彫刻家の中谷省古のもとに出入りするようになる。
1894年(明治27)	23歳	この年早々、胸部疾患のため今津村に帰郷し、静養する。今津・薬師寺の熊野智雲師の知遇を得る。
1895年(明治28)	24歳	春、回復し本格的に彫刻を学ぶ決心をして大阪に出る。再び中谷省古のもとに弟子入り。
1926年(大正15・昭和元)	55歳	長女幾久代が逝去(満18歳)。平櫛は死を悼み、福山・善立寺に(大日如来香合)を奉献。
1934年(昭和9)	63歳	2月、今津小学校創立60周年を記念して、書《至誠》を同校に寄贈。
1935年(昭和10)	64歳	4月、父・母・継母の菩提を弔うため、福山・善立寺に《馬郎婦菩薩》を奉献。今津小学校に《蕪村像》を寄贈。
1962年(昭和37)	91歳	11月、文化勲章を授与される。
1965年(昭和40)	94歳	4月24日、松永市名誉市民の称号を贈られる。(如是仙人)(灰袋子)を松永市に、(西山逍遙)を広島県立松永高等学校に寄贈。今津・薬師寺を訪れる。亡き父母を弔うために《薬師仏尊像》を制作し奉献。
1966年(昭和41)	95歳	5月、福山市との合併により福山市名誉市民となる。
1968年(昭和43)	97歳	福山市今津町の旧居址に石碑が建てられる。
1970年(昭和45)	99歳	6月、東京都小平市学園西町に転居。福山市沼隈町出身の弟子・濱田泰三が平櫛の旧宅(東京・上野桜木町)に移り住み、晩年の平櫛を支える。
1971年(昭和46)	100歳	福山市の主催で「福山市制55周年記念 百翁 平櫛田中展」(於天満屋福山店)が開催される。
1974年(昭和49)	103歳	プロレスの《五浦釣人》を福山市へ寄贈。2月、山陽新幹線開通と福山駅舎落成を記念して、福山駅前に設置される。
1979年(昭和54)	108歳	12月30日、小平市の自宅にて逝去。満107歳。
1980年(昭和55)		岡山県総合文化センターや井原市立田中美術館で平櫛を偲ぶ特別展が相次いで開催される。10月、福山城博物館で「平櫛田中秀作展」を開催。

※本年表の作成にあたっては「平櫛田中の全貌展」図録(井原市立田中美術館 2003年)所収の年譜(青木寛明編)を一部参考にした。

【編集後記】

「じゃあ釣り人で待ってるね」と多くの福山市民はこんなフレーズを当たり前のように使い、表紙の像の立つ福山駅前広場を待ち合わせスポットとして利用しています。だいたいの市民はその彫刻の作者が平櫛田中であることは知っていますが、これを鞆の浦で釣りをしてる姿だと誤解している人はよくいます。今回の展覧会で茨城県の五浦における岡倉天心の姿であり、どのような経緯で福山に建てられたのか、再認識してもらえるいい機会になるのではと期待しています。ここで待ち合わせる若者たちが、市外から来た人たちに嬉しそうに説明する姿が見受けられるようになることを願っています。

(学芸課長 谷藤史彦)

第1室：平櫛田中と福山

番号	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)	所蔵
1	平櫛田中	(1872-1979)	尋牛	1948	木,彩色	77.5×23.5×51.8	福山城博物館
2	平櫛田中		灰袋子	1964	木,彩色	80.8×43.7×25.6	福山城博物館
3	平櫛田中		灰袋子説明文	1965	紙本墨書	27.0×39.6	福山城博物館 ☆
4	平櫛田中		良寛来		ブロンズ	58.5×30.7×24.2	福山城博物館
5	平櫛田中		鶴肇		ブロンズ	60.5×28.0×16.8	福山城博物館
6	平櫛田中		蕪村像	1935	木,彩色	27.0×31.0×24.0	福山市立今津小学校
7	平櫛田中		布袋	1928頃	木	26.2×16.5×19.0	当館蔵
8	平櫛田中		鶴寿		木,彩色	5.0×11.0×4.5	個人蔵
9	平櫛田中		新春小景	1926	木,彩色	20.0×20.0×23.0	個人蔵
10	平櫛田中		二つ乃狗児	1926	木,彩色	19.0×41.0×28.0	個人蔵
11	平櫛田中		福助	1950年代	木,彩色	3.5×3.3×3.2(本体)	個人蔵
12	平櫛田中		福聚大黒天尊像	1965	木,彩色	7.0×7.5×7.7	個人蔵
13	平櫛田中		桃李花開一杯酒	1978	紙本墨書	136.8×34.7	福山城博物館
14	平櫛田中		春風春水一時到	1978	紙本墨書	138.7×34.3	福山城博物館
15	平櫛田中		いんまやらねば	1968	紙本墨書	33.5×126.0	福山市立今津小学校
16	平櫛田中		至誠	1934	紙本墨書	47.0×142.0	福山市立今津小学校
17	平櫛田中		寂	1978	紙本墨書	26.3×22.5	福山市立今津小学校
18	平櫛田中		薬師仏光背及蓮座銘文	1965	紙本墨書	69.5×33.5	福山・薬師寺 ★
19	平櫛田中		不動		布製	35.9×65.5	
20	平櫛田中		出入無事	1973	紙本墨書	139.2×33.7	
21	平櫛田中		てが美	1940-42/1969	紙本墨書	23.2×1089.2	
22	平櫛田中		五浦釣人像銘文	1963	紙本墨書	27.2×24.2	
23	平櫛田中		戒語 けふもおしごと	1973	紙本墨書	23.5×31.8	☆
24	平櫛田中		貧乏極楽	1972	紙本墨書	38.5×26.5	★
25	平櫛田中		行雲流水	1978	紙本墨書	138.0×34.0	☆
26	平櫛田中		間房春草深	1978	紙本墨書	138.0×34.0	★
27	平櫛田中		西山禾山老禅師提唱	1974	紙本墨書	135.0×29.0	☆
28	平櫛田中		今日風気佳	1965	紙本墨書	139.0×46.0	★
29	平櫛田中		忍	1969	紙本墨書	27.0×24.2	
30	平櫛田中		和	1969頃	紙本墨書	27.2×24.2	
31	平櫛田中		和	1975	紙本墨書	27.2×24.2	
32	塩出英雄	(1912-2001)	春雪	1975	紙本着色	53.6×73.9	当館蔵 ☆
33	塩出英雄		伊闕	1978	紙本着色	62.3×82.0	当館蔵 ★
34	澤田政廣	(1894-1988)	微風	1939	木,彩色	28.0×31.0×20.5	当館蔵
35	澤田政廣		裸婦	1970	パステル,紙	54.0×38.0	当館蔵 ☆
36	澤田政廣		裸婦	1970	パステル,紙	53.0×37.0	当館蔵 ★
37	澤田政廣		裸婦	1970	パステル,墨,紙	52.5×38.0	当館蔵 ☆
38	澤田政廣		裸婦	1970	パステル,紙	53.0×35.0	当館蔵 ★
39	澤田政廣		裸婦	1970	パステル,紙	53.0×37.0	当館蔵 ☆
40	澤田政廣		裸婦	1970	パステル,紙	44.5×30.0	当館蔵 ★
41	圓鍔勝三	(1905-2003)	漁婦	1937	木	40.0×135.0×107.0	当館蔵
42	土谷 武	(1926-2004)	植物空間VI	1990	鉄	64.0×57.5	当館蔵
43	澄川喜一	(1931-)	翔 I	2005	神代禱,ステンレス・スチール	146.0×38.0×38.0	当館蔵
44	(資料)		平櫛田中の肖像写真	1970頃	プリント	53.0×40.5	福山城博物館
45	(資料)		平櫛田中の肖像写真	1965	プリント	30.4×25.2	福山・薬師寺

第2室：日本の近現代美術

46	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩,カンヴァス	33.6×45.7	
47	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とビンと茶碗と湯呑)	1917	油彩,カンヴァス	33.7×45.8	
48	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩,カンヴァス	31.9×41.0	
49	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩,カンヴァス	47.2×24.8	
50	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩,カンヴァス	116.7×91.0	

番号	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	☆前期展示 ★後期展示 *寄託作品	
						縦×横×奥行 (cm)	
51	吉田卓	(1897-1929)	卓上静物	1925	油彩,カンヴァス	91.0×73.0	
52	須田国太郎	(1891-1961)	冬の漁村	1937	油彩,カンヴァス	48.5×59.7	
53	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-4	油彩,カンヴァス	89.3×72.8	*
54	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩,カンヴァス	90.9×72.7	
55	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩,カンヴァス	52.0×44.0	
56	野口彌太郎	(1899-1976)	タンジールにて	1975	油彩,カンヴァス	130.3×97.3	
57	藤井松林	(1824-1894)	百花百鳥之図	1889	絹本着色	121.2×54.0	☆
58	富岡鉄斎	(1836-1924)	児童歓喜之図	1922	紙本淡彩	133.0×32.6	☆
59	大村廣陽	(1891-1983)	赤インコに青鶯		絹本着色	145.0×49.6	★
60	大村廣陽		南国草葉に双禽		絹本着色	133.5×42.2	★
61	福田恵一	(1895-1956)	安養	1926	絹本着色	236.0×434.5	
62	荒川修作	(1936-2010)	緩慢な動きの中の認識できないものを調整し続ける(ナンバー)	1973-74	油彩,アクリル,カンヴァス	165.0×246.5	
63	高橋秀	(1930-)	ブルーボール#101	1971	油彩,カンヴァス	142.0×190.0	
64	高松次郎	(1936-1998)	パイプをくわえた男	1970	油彩,カンヴァス	72.7×90.9	
65	高松次郎		形(No.1201)	1987	油彩,カンヴァス	218.0×182.0	
66	松本陽子	(1936-)	再び生命体について	2008	油彩,パステル,木炭,カンヴァス	200.0×200.0	
67	松本陽子		荒野での試み	2010	油彩,パステル,木炭,カンヴァス	194.0×259.0	
68	髷嘸	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩,木	75.0×45.0×50.0	
69	豊福知徳	(1925-)	風塔'83	1983	マホガニー	174.0×70.0×54.0	
70	野田正明	(1949-)	可能性	2005	ブロンズ	50.0×49.0×40.0	

第3室：ヨーロッパ美術

71	ジュゼッペ・パルッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩,カンヴァス	49.0×72.0	
72	ジョアンニセガティエリ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩,カンヴァス	120.0×87.0	
73	ウジェーヌ・カリエル	(1849-1906)	腕組みの座る女		油彩,カンヴァス	46.0×38.0	
74	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩,板	51.0×65.0	
75	アンドレ・ドラク	(1880-1954)	婦人像	1925	油彩,カンヴァス	61.0×73.8	
76	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵(17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩,パネル	81.0×60.0	*
77	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩,カンヴァス	60.0×47.0	
78	クルト・シュヴィッターズ	(1887-1948)	抽象19(ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩,厚紙	69.5×49.8	
79	ウンベルト・ボッチョーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩,カンヴァス	58.0×46.0	
80	ジャコモ・バッタ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩,カンヴァス	51.0×60.5	
81	フォルトゥナート・デペロ	(1892-1960)	5本の鉛筆	1929	コラージュ,色紙	47.0×67.0	
82	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩,カンヴァス	80.0×60.0	
83	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩,パステル,紙,カンヴァス	194.0×150.0	
84	ジュゼッペ・カボグロッシ	(1900-1972)	表面170	1955	油彩,カンヴァス	114.0×162.0	
85	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩,ガラス,カンヴァス	60.0×50.0	
86	メダルド・ロッシ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス,石膏	37.0×30.0×17.0	
87	アルトゥーロ・マルティエリ	(1889-1947)	牛	1943/89	ブロンズ	28.5×34.0×13.0	
88	オットー・グートフロインド	(1889-1927)	ヴィキ(立体主義的頭部)	1911-13	ブロンズ	33.1×25.0×25.0	
89	ジャコモ・マンズー	(1908-1991)	肖像	1950	ブロンズ	64.0×44.0×36.0	
90	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0×80.0×90.0	

和室 松本コレクション「涼やかさ」

91	清巖宗渭	(1588-1661)	風竹一行	江戸時代	紙本墨書	102.5×27.5	*
92			色絵備前布袋香合	江戸時代	陶	高2.5 径5.9	*
93			備前緋摺割蓋茶入	江戸時代	陶	高4.3 径9.2	*
94			青井戸茶碗 銘 岩波	朝鮮王朝時代	陶	高6.0 径14.0	*
95			伊羅保内刷毛目茶碗 銘 岩清水	朝鮮王朝時代	陶	高7.4 径16.2	*

目録のつぎの箇所にも誤りがありました。お詫びして訂正します。

1 頁 プレートの説明文 3 行目

誤：一九七四年二月

正：一九七五年二月

・ 3 頁 下から 3 行目

誤：この作品は 1974 年（昭和 49 年）2 月、

正：この作品は 1975 年（昭和 50 年）2 月、

・ 4 頁の関連年表

誤：1974 年（昭和 49） 103 歳 ブロンズの《五浦釣人》を福山市へ寄贈

正：1975 年（昭和 50） 104 歳 ブロンズの《五浦釣人》を福山市へ寄贈